



的過程をどれほど正確に表象しているのか、その信憑性を疑う声も根強い。しかし生田が指摘するように、師匠 - 弟子間でかわされる「わざ言語」のような特別な言葉のやりとりでは、継承者が行為を再現しやすいように意図的に婉曲された表現が用いられており、行為そのものの分析というよりも伝承過程の分析という観点に立てば、プロトコルの有用性が期待される(生田, 1987)。一方、筆者らが注目する生態心理学は、知覚論とすぐに連想されがちではあるが、その真意は知覚と行為とが環境からは切り離せないこと、<主体 - 環境>というペアを分析の単位とすべきこと、など示唆に富む指摘を多く含んでおり、行為の分析において実験前に現象を特定する変数を絞り込まず、躊躇など行為のよどみにより多くの注意を注ぐ分析手法であり、より深い行為分析の可能性が期待される。

## 2 生態心理学的分析の説明可能性

本稿では、ブルンスウィックのレンズモデルを参考とする(Brunswik, 1956)。ブルンスウィックは、手がかり(近刺激)と環境(遠刺激)との関係について、その手がかりを中心とした対称構造によって説明し、「手がかりの生態学的妥当性」と「手がかり利用の妥当性」とを明確に区別したことで、人間の認知過程が個人ごとに異なって多義的であることを説明した。筆者らは、このレンズモデルを複数の判断主体に拡張した Triple system design に準えて技能継承過程を分析し、技能継承過程に伴うスキル伝承の困難を、1) 熟練者からの技能抽出の困難と、2) 継承者自身の技能体現化の困難、という二つに整理した。従来であれば、熟練者の利用する手がかりというものが容易に抽出できて、これを継承者に押し付けさえすればよいとする見方から安易に技能継承が考えられてきたが、筆者らはこれに対応するインタラクションを実現する必要性を説き、対話型技能継承支援システムの設計を試みた(塩瀬, 2001)。詳細については当日の発表において報告する。

## 参考文献

海保, 原田編: プロトコル分析入門, 新曜社, 1993。

生田: 「わざ」から知る(認知科学選書), 東京大学出版会, 1987。

塩瀬ほか: インタラクティブ技能継承支援エージェントの設計, HI 学会論文誌, Vol.3,3, pp 81-93, 2001。

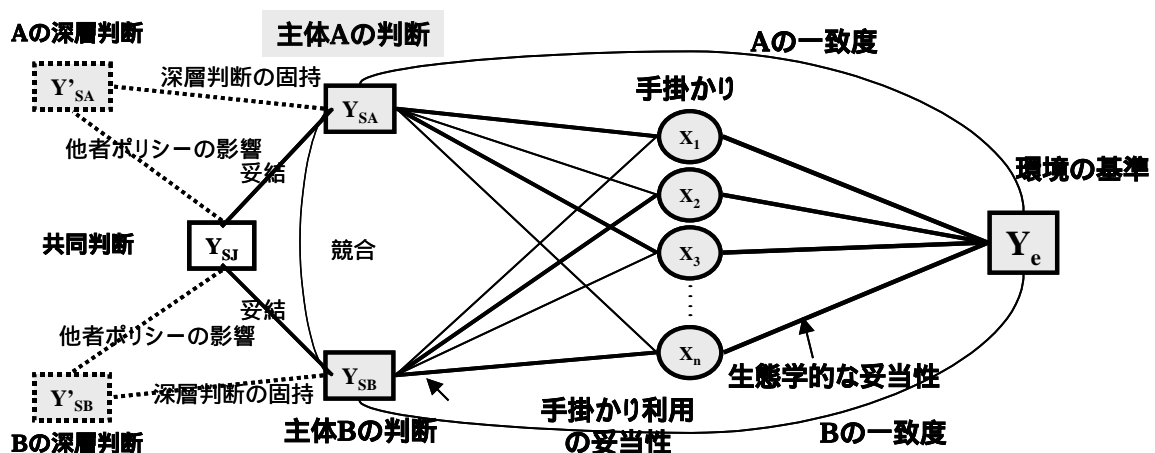


図2 Triple system design からみた技能継承